

◇第 159 回日本児童文学学会関西例会◇

日時 2025 年 9 月 13 日(土) 13 : 00～16 : 30 (予定)

会場 大阪府立中央図書館 2 階大会議室

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1

開会の辞 (13 : 00～)

研究発表 (13 : 10～14 : 10)

1. チャン・ティ・ゴック・クイー氏 (立命館大学大学院博士課程前期課程 1 年)
「ベトナム・タイ族の子守唄に見る自然観 ―産育儀礼とアニミズム世界―」
2. 川北典子氏 (元 大谷大学)
「明治・大正期の京都における児童文化活動」

講演 (14 : 30～15 : 30)

遠山光嗣氏 (新美南吉記念館館長)
「新美南吉とセンス・オブ・ワンダー」

交流会 (15 : 40～16 : 30)

連絡先：鵜野祐介 y-uno@fc.ritsumei.ac.jp

ベトナム・タイ族の子守唄に見る自然観

—産育儀礼とアニミズム世界—

TRAN Thi Ngoc Quy (立命館大学大学院博士課程前期課程 1 年)

ベトナムは 54 の民族が共に暮らす多民族国家である。本発表では、ベトナム北部ソンラ省ショブコップ郡を中心に居住するタイ族の産育儀礼において歌われる子守唄に焦点を当て、その中に現れるアニミズム的自然観の特徴を分析する。

タイ族は、「すべてのものに魂（タイ語：クアン）が宿る」というアニミズム的な世界観を持ち、自然と深く結びついた生活を送っている。民族の人々は、自然を単なる資源ではなく、人間と対話可能な存在として捉えている。この考え方は、妊娠から出産、育児に至るまでの一連の儀礼にも色濃く反映されている。

タイ族の子守唄は、単に子どもを寝かしつけるためのものではなく、魂を呼び戻し、守り、導くという儀礼的な役割を果たしている。歌詞には自然の万物（川、山、植物、動物など）が頻繁に現れ、それらが癒しや保護の力を持つ存在として捉えられている。これは、自然と人間との精神的なつながりを強く示唆している。

産育儀礼は大きく 3 つに分けられ、それぞれ固有の意味を持つ。

1. **産後儀礼**：出産の後、母子の魂はまだ弱いため、火の力で母子を守り、悪霊を祓う。
2. **命名儀礼**：自然の力で産後の弱りを祓い、母体の回復を助けるための伝統的儀礼であり、子どもの魂を呼び戻す。
3. **先祖入魂の儀礼**：シャーマンが歌う子守唄を通じて、子どもを祖先の共同体に迎え入れる。

タイ族の子守唄を通じて見えてくるのは、アニミズムに基づいた独特な自然観である。自然は魂を持ち、人間と深く関わる存在として捉えている。子守唄は人間同士及び自然のそれぞれの魂を繋ぐ「声」として重要な役割を果たしていることがわかる。つまり、子守唄は「歌霊」となり、「魂呼び」を通じて「自然」と「人間」を結びつける、精神文化の結晶とも言え、自然と共に生きる民族ならではの深い思想を私たちに語りかけているのである。

最後に、このような子守唄の実践は、人類学的なアニミズムの典型であり、人間と非人間の存在が共通の「いのちの質」を分かち合う世界観を体現している。脱人間中心主義の視点から見れば、子守唄は人間中心的な境界を超えた相互依存的な関係を構築し、開かれた認識の基盤を提供する文化的実践である。今後は、そうした実践が持つ教育的役割についても検討してみたい。

明治・大正期の京都における児童文化活動

川北 典子（元 大谷大学）

大正期から昭和初期にかけて、巖谷小波や久留島武彦が全国を行脚し、子どもにおはなしを語り、おとなに対しても口演童話の理論や方法について示したことによって、口演童話は隆盛を極め、全国で数千人にもものぼる口演童話家が活躍した。京都では、いち早く 1907(明治 40)年に「京都お伽俱樂部」が結成されている。本報告では、京都におけるお伽俱樂部や口演童話家の活動に焦点をあて、当時子どもやおとなをとりまく文化的環境に注目するとともに、地域で子どもが豊かに育まれる機会について考察を深めた。

京都お伽俱樂部は、1907(明治 40)年 4 月、鈴木吉之助を会長、中野忠八を副会長、松井治助を会計として結成された。鈴木吉之助は、扇骨問屋の五世鈴木伊兵衛の三男として生まれ、修道尋常小学校、市立第一商業高校を経て上京、日本大学商科を卒業した。在学中に巖谷小波と知己になり、お伽噺の直伝を受けたといわれる。25 歳で市会議員、後には衆議院議員となり、実業家としても政治家としても名を残している。中野忠八は、薬問屋の七代目として、父の急死後は、20 代で京都薬業界のリーダー的役割を担うようになり、修道学区の学務委員としても多大な発言権を持っていた。また、日本のボーイスカウトの前身であるとされる「京都少年義勇軍」を組織したが、その活動に終始ともに参与していた実弟の秀三郎は、後に久留島武彦の長女と結婚し、久留島家を継ぐことになる。松井治助は、銅駝尋常小学校区に代々続く酒造家に生まれ、同校同窓会を創設した。学務委員も務め、修道学区の学務委員であった中野と親交を深める。後には、中野の実妹との結婚により姻戚関係となり、以後彼らを中心に、若い芸術愛好家が集うことになる。

その他、京都お伽俱樂部には、『戦友』の作者として知られ、1910(明治 43)年に修道校の校長となる真下瀧吉(飛泉)、大阪お伽俱樂部の創設者の一人であり、お伽劇団を組織した高尾亮雄、狂言師の二世茂山千作などがかわわっていたとされている。実は、京都お伽俱樂部の実際の活動は 1907 年の設立以前から始まっていたと思われる。鈴木や中野が中心になって活躍していた修道同窓会は、1897(明治 30)年の結成以来、すでにお伽噺、幻燈などの会を地域において開催していたという記録もあり、京都お伽俱樂部設立の素地は十分つくられていたと考えられる。したがって、京都お伽俱樂部は、茂山社中のお伽狂言も含め、東京や大阪のお伽俱樂部との連携は保ちながらも、独自の活動を展開していたといえる。

そのような京都お伽俱樂部の活動は、財力も政治力も備えた人々だからこそ具体的なかたちになり得たものだったのかもしれない。しかし、彼らがさまざまなネットワークを構築しながら、子どもとともにお話の世界を楽しんでいた姿からは、単なる土地の名士の道楽などではなく、学校教育以外のところで子どもの育ちを支えていこうとする心意気を感じられる。口演童話は、時に講堂や公民館において千人の単位で実演されたというが、まだ音響設備も不完全な時代に、それほど多くの観客を魅了した話術の価値はもとより、耳を澄ませてお話を聴き、物語の世界を共有し楽しむ親子の姿から示唆されるものはたくさんある。教育の場で、地域で、家庭で、心豊かに子どもが育つために、今われわれができることを検証していきたい。